

生ける水

聖霊による刷新のために

共同体を再び築き上げる

CHARISモデレーター ピノ・スカフーロ

「カリス・インターナショナル」二〇二二年十一月十八日の記事から

もし羊飼いが九十七匹の羊を見失ったら

二〇二一年は前年に引き続き、人類にとって困難な年となりました。パンデミックはほとんど誰も予想しなかった出来事であり、即興で対処する必要があります。教会も、カトリック・カリスマ刷新に奉仕するCHARISも、そのようなことは想像もしていませんでした。

特に、私たちが二〇一九年に残してきた教会、共同体、グループは、二〇二二年に同じ姿をとどめてはいないでしょう。

何か月もの間、公に集まれる場所は閉鎖され、教会の集会は最も影響を受けた活動の一つでした。これほど長期間にわたり直接顔を合わせて集う機会がないまま共同体の交わりを維持することは、まさに挑戦です。私たちのこの恵みの潮流では、絆、触れ合い、親密なつながり、共同体で祝うことの喜びが集いの中心であるだけに、なおさらです。

インターネットにアクセスできる人々は、そのおかげで、祈る共同体を継続することができました。統計によると、そのような

場合、ほとんどのグループが存続しています。加えて、便利なバーチャル・ネットワークのおかげで、グループのメンバーは、他の教区や国にいる人たちの集いにも参加することができるようになりました。

一方、あるグループは休止し、あるグループは消滅し、ある人々はオンラインに移行したグループの集いに参加しなくなり、教会そのものに行かなくなりました。多くの人が信仰を捨てました。ある人は、自分の必要に応じて、さまざまな情報源から独学で霊性を学びました。ほとんどの人はまだ信仰を持っていますが、それでも、共同体がなければ、その信仰は方向感覚を失い、結局は迷子になってしまうかもしれません。

共同体とは、人々を支え、癒し、助け、導くものであり、全ての人々が最も実り豊かな人生を送るために神が意図された場所です。

多くの場合、教会は線路から何キロも離れている大きな駅のように見えます。それは駅が線路から離れたからなのか、線路が駅から離れたからなのか、あるいはその両

☆ 目 次 ☆

共同体を再び築き上げる (ピノ・スカフーロ) ……………	1
「四旬節オンライン賛美の集い」開かれる (小熊晴代) ……………	2
ペンケレシ師とフォールテン師を偲んで……………	5
聖霊刷新 50周年を振り返る [特集1] 聖霊刷新と私 (奥山崇夫/久保伊都子/市川章子) ……………	8
お知らせ ……………	12

発行

聖霊による刷新

全国委員会

編集委員

中村友太郎
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021
東京都品川区上大崎2丁目
10-34-2-312

聖霊による刷新全国委員会

Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878

口座名 聖霊による刷新全国委員会

方だからでしょうか。状況がどうであれ、私たちは教会を―線路に近づけ、生活に近づけ、人々がいて様々な状態で―過ごしている場所に近づける必要があります。

一般に、欧米諸国では、自らをキリスト者と呼ぶ人のうち、定期的に教会の礼拝に出席する人はわずか3%です。イエスのたとえ話を現在の状況に当てはめると、「あなたがたの中に、百匹の羊を飼っている人がいて、

そのうちの九十七匹を見失ったとすれば、三匹を野原に残して、見失った九十七匹を見出すまで捜し回らないだろうか」と言われていたようなものです。これは手強い数値ではありませんか。

私たちは、神を探し求めている人々に、自分にとって神がどれほど必要かに気づいていない人々に近づいて行く必要があるのです。

教皇フランシスコが主張してきた、出向いていく教会は、こ

れまで以上に意味を帯びてきます。

なすべきことは膨大ですが、それと同じくらい膨大に、世界が必要としているのは、宣べ伝えられる「福音」を聞き、希望が世界にもたらされることです。教皇フランシスコは何年も前から、「聖霊による洗礼の豊かさ」を教会のすべての人と分かち合う」という私たちの使命を主張し続け、この大作戦のために私たちを準備してきたのです。

神が私たちに与えてくださった聖霊による洗礼は、私たちがそれを握りしめて手放さないためではなく、疲労を力に変え、絶望を信仰に変えるために分かち合うためにこそあります。

今年、CHARISは、世界のあらゆる表現のニーズに応えるべく、全力を傾けて、一連の奉仕を準備しています。

下げられました。主な内容は以下の通りです。

◆「新しいぶどう酒は新しい革袋に」という表現は、一般社会では、新しい方針には新しい組織を立ち上げなければ元の木阿弥か前よりも悪くなり瓦解してしまうたとえに使われています。しかし、出典の福音（マタイ9・17、マルコ2・22、ルカ5・38）で言う「新しい」も「ぶどう酒」も「革袋」も、それ自体が神学的な考察や教会論的な意味を担っています。

カトリック聖霊による刷新と

「四旬節オンライン賛美の集い」開かれる

全国コムニオ奉仕会 コーディネーター 小熊晴代

四旬節第三主日の3月20日、「四旬節オンライン賛美の集い」が開催されました。この集いを準備し始めた時には予期していなかったロシアによるウクライナ侵攻が灰の水曜日の六日前、2月24日に始まり、3月15日には、教皇フランシスコが神のお告げの祭日3月25日にバチカンの聖ペトロ大聖堂で行われる共同回心式の中でロシアとウクライ

ナをマリアの汚れなき御心に奉献する、と発表されました。私たちのこの集いも、教皇様と全世界の司教団・信徒と心を合わせつつ、キリストの平和を求めながら賛美のいけにえを神に献げるひと時となりました（ヘブライ13・15参照）。「参加できなかった方、もう一度振り返りたい方は、「カトリック聖霊による刷新」の公式サイト、

<https://crljapan.org>に掲載されているリンクからご覧ください。」
秋元伸介・恭子夫妻のリードで40分たっぷり賛美の歌と祈りを献げた後、全国コムニオ奉仕会の顧問、畠基幸神父様より講話をいただき、集いのテーマであり私が本紙前号で分かち合った御言葉、「新しいぶどう酒は新しい革袋に」がより深く掘り

いう「恵みの潮流」は五十年余で世界の隅々に到達し、その中で生まれて成長して来た二つの国際奉仕機関は、二〇一九年六月に教皇フランシスコの主導で合体し、教皇庁の信徒・家庭・いのちの部署よりカリス（CHRIS、カトリック・カリスマ刷新国際奉仕会）という単一組織として認可を受け、新たに

歩み始めました。あれからほぼ三年、「新しいぶどう酒は新しい革袋に」という御言葉に改めて照らしてみましよう。組織名が変わっただけで中身は同じ聖霊だ、あまり心配しないでもいいですよ、と言いたいところですが、聖霊への理解が新しくならないといけないのかなと思えます。教皇様の思いは何であったのか、それをもう少し知ることによって新しいぶどう酒の意味がもうちょっと分かってくるのではないのでしょうか。

教皇様の頭と胸の内には、二〇二三年の開催に向けて現在進行中のシノドスがすでに思い描かれていたのではないでしょう

か。全教会の信徒一人一人が自らの信仰の道を教会の道、つまり聖霊に導かれて共に歩む、その旅を体験することで一人一人が教会であることを一人一人が実感できるためにも、旅する教会の道を確認する必要があるのではないか。そういう信仰の見直しを教皇様は求めておられると思います。

これに関して少し振り返ると、二〇一七年の聖霊による刷新五十周年記念式典に先立つ二〇一三年十一月に使徒的勧告『福音の喜び』、それから一年半後の二〇一五年五月には回勅『ラウダート・シ 共に暮らす家を大切に』が発表され、教会の中心部の霊性である御言葉の霊性を刷新することに非常に重きを置かれたと思います。『ラウダート・シ』が発表された翌月、私はカリスの前身組織の一つ、ICCRSがローマで開催した第三回聖霊による刷新国際司祭黙想会にも参加しましたが、そこで感じたのは、新しいぶどう酒が古いぶどう酒に変わってしま

っている、ということでした。「古いものが良い」という世俗化した教会の姿に対して、『福音の喜び』の中で教皇様は、現在のグローバル化の文化の影響を受けた「霊的な世俗性」という言葉を使っておられます。

「霊的な世俗性は、教会への愛および宗教性の外観を装い（…）主の栄光ではなく、人間の栄光と個人の幸せを求めます」（93）。「このような教皇様の意識は的確だったと思います。「この暗い世俗性」（95）、「わたしたちを窒息させるこの世俗性」（97）が「個人主義、アイデンティティの危機、熱意の低下」（78）につながっているのです。そして、二〇二〇年十月、パндеミックに苦しむ世界に向けて、回勅『兄弟の皆さん』が発表されました。第一章の社会分析に続いて、第二章は善いサマリヤ人のたとえ話を解説の形で、未来の教会が外に向いて行くための回心の必要を解き明かしておられます。個人としても、神の民としても、人間の尊厳に

ついでに理解を根源的に信仰の核心として受け止め、回心しなければならぬ、ということだと思います。教皇様の言葉では、「対立の文化」ではなく、「出会いの文化」を中心に置く信仰の実践ですね。

ここで、対立の文化は古いぶどう酒と古い革袋のシンボル、そして新しいぶどう酒と新しい革袋は出会いの文化のシンボルとして考えてみます。古いぶどう酒はレビ人や祭司が飲む上等のワイン、新しいぶどう酒はサマリヤ人が飲む安物のワインです。では、イエス様自身の血の盃として使徒たちに与えてくださった御血は、どちらのぶどう酒でしょうか。『ルカによる福音書』10・33〜34によると、「その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばにのせ、宿屋に連れて行って介抱した」。「油とぶどう酒を注ぎ」と書いてあります。油は聖霊の塗油であり、いやします。ぶどう酒はイエスの血であり、罪を贖いま

す。サマリア人は、それと知らないままにキリストの救いの業に参加していたのです。貧しい人の尊厳を守る行いは、キリストとの出会いです。キリストの業に参加することは、愛の賜物である愛の行為を行うことです。そして、これが、教皇様が見ておられる、新しいぶどう酒を入れる新しい革袋、出会いの文化のしるしです。福音に繰り返し登場する主題の旋律と言ってよいでしょう。小さな者、貧しい者に神様が愛を注いでおられる、そして小さな者、貧しい者の内に神との出会いがあり、超越的な次元、神ご自身、神のペルソナとの出会いを体験します。出会いは、ペルソナとペルソナとの出会いです。聖霊による刷新は、このペルソナということをもう一回見直していく、その発見だと思えます。『カトリック教会のカテキズム』(731、732参照)にも書いてあることですが、超越的な次元、神のペルソナとの出会いによって、私たちは神をお父さん、アバ、父よ、と呼

ぶ神の子の霊に満たされるといふ体験をいたしました。イエス様がヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けた時に、聖霊が鳩の形で降って来て、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と声がしましたが、それは私たちのためのものだったと思います。この御父と御子の深い交わり、イエス様は生まれる前から神の御子でしたけれども、おとめマリアから体を受け、人となられたこの方が、私たちの信仰の道、御父の道を歩んでくださる、聖霊によってお生まれになった方は聖霊によって歩むという道を私たちに示されたのです。私たちも洗礼を受けた時に父の子とされる再生の恵みを受け、赦され、神の子とされてキリストと結ばれて行く道を歩む者になりました。しかし、幼児洗礼の人を含め、洗礼を受けただけで自分は神の子だという自己認識に至っていない人々があります。聖霊による洗礼の恵みは、自己認識、自己理解を与えます。自分は何であるか、

アイデンティティを明確にする、そういう賜物であると思います。ですから、この新しい組織、カリスは聖霊による洗礼をどんどん進めてくださいと、教皇様がおっしゃっているわけです。私たちは聖霊生活セミナーを開いたり、機会があるごとに聖霊による洗礼を受けたりしますが、「このように頭に手を置いたら確実になる」という形ではなく、「ペルソナの神様に出会う体験なのだ」という認識が必要ではないでしょうか。そうではないと、いろんな霊がありますから、古いぶどう酒はおいしいいぶどう酒だよと誘う力の霊に満たされてしまったり、歪んだ思いに囚われたりします。神の子の霊は御父との交わり、この私たちが聖霊の交わりに至る教会的なものです。ニケア・コンスタンチノープル信条で宣言するように、私たちが信じるのは、「主であり、命の与え主である聖霊」です。新しい組織、新しい中身は、新しい気づきに私たちを招いています。

教会の歴史を簡単に顧みても、新しいぶどう酒は教会の命の源泉ですし、イエス様が最後の晩餐で命じられた、「これをわたしの記念として行いなさい」の「これ」というのは、多くの人々の罪の赦しとなる新しい永遠の契約の血を記念するということが典礼において現在化されています。イエス様の言葉と行いが現在化されて、私たちはミサに与ることを通してキリスト化され、キリストと共に派遣されて行く、キリストの命を私たちはもたらす者となる、そういう宣教へと私たちは促されて行くのです。だから、どのミサも、「感謝の祭儀を終わります」で終わるのではなく、「行きましょう、主の平和の内に」と派遣されて出向いて行く恵みがあるわけです。そのような流れの中に私たちはいるのですから、一番中心にあること、聖霊による洗礼によって私たちは神の御子と一体であるとはどういうことなのかをよく理解しましょう。そしていただいた愛の賜物を必要に応じて

生かしましょう。愛の賜物は、常々願うと現れます。目に見えない聖霊が目に見える形で私たちの働きを通して現れてくださいます。聖霊はいつも流れる感じです。風であったり鳩であったり指であったり、私たちの働きの中に聖霊はおられ、私たちの行いの中にキリストの業が働きます。聖霊とキリストは切り離せないものだし、祈る時は三位一体の神が実在し、今ここにおられると新たに認識する機会であるはずで。

聖霊による洗礼の特徴の一つは、その恵みをいただいて、恵みによって働いたり執り成しをしたりすることです。復活された主が生きておられる。賛美や詩編の言葉、福音朗読を通して今日あなたがたが耳にしたとき

日本での七十三年間の宣教一筋に司祭職を生きられ、日本の土となられました。ことにわが国の聖霊による刷新においては、

実現した、この言葉、臨在、主が共におられる、そのことを中心にしていけますが、それは一人または三人がわたしの名によつて集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18・20)というイエス様の約束が響いていて、共同体的なものです。共同体は非常に大切です。今は本当に個人主義が中心になつてきて、集まることも難しい。

私の所属する修道会も創立当初の三百年前は一つの部屋に十人くらい住んでいたのに、今の神学生は始めから個室で生活を始めます。でもミヤンマーに行つたら、みんな大部屋でした。司祭叙階の直前になつてようやく個室になります。ずっと相部屋で暮らしていますから、互いに思いやるという精神が培われる

初期から一貫してご奉仕に打ち込んでこられました。心を合わせて、神父様の永遠のご冥福をお祈りいたしましょう。

のですが、私自身の養成を振り返つても、私も子供の時から一人部屋で、修道院に入つても一人部屋、叙階も何もかも一人で、宣教も派遣されたら一人しかいませんでした。一人ではない、イエス様が共にいる、インマヌエル、共にいるという信仰でようやく私たちは立つてい

ると思います。私たちは一人にされてもイエス様が一緒にいる、共におられるということも、はつきりと告白したいと思います。現在私たちに求められている新しい革袋は、教皇様が言われるように、十字架上で見捨てられたイエス様に対する私たちの取り組みです。パンデミックが起こり、教会は集まることすら難しくなりましたし、今はウクライナにロシアが侵攻して戦争

最晩年に神父様の身近におられたシスター新田美代子様からは、次のような簡単なメッセージをいただきました。

状態です。キエフは日本では言えませんが京都や奈良のようにロシアの中心のようなところですが、ロシアはそこを破壊しています。自らを破壊しているようなものです。だから、私たちは祈り続けましょう。

◆この講話の後、参加者全員で、ウクライナとロシアを始め紛争のある世界各地に平和が訪れるように、また各自の意向のためにも、執り成しの祈りを献げ、感謝と賛美の祈りの内に閉会となりました。今回の参加者は約80名でしたが、全国コムニオ奉仕会の呼びかけに応じて大勢の方が寛大な心で献金して下さり、総計30万円をウクライナ危機人道支援のためカリタスジャパンに募金することができました。皆様に感謝、主に栄光！

「神父様はApple Macのコンピュータを使っておられました。そのコンピュータを遺品として私に残してくださいました。その内容は膨大な保存書籍として、一九七六年からの

ジャン・マリー・ペンケレシ神父様、二〇二二年一月七日帰天。 一月十二日、神戸中央教会にて葬儀ミサが行われました。



いつも喜んでいなさい。
 絶えず祈りなさい。
 どんなことにも感謝しなさい。
 I テサロニケ・5・16-18

パリ外国宣教会
 ペンケレシ ジャン マリー神父
 1924~2022

教会司牧に関するもの、毎日の日誌、聖霊刷新のみことばなどが保存されていますが、私が見ただ Apple Map の操作がわからず、もたもたしながらも、大切に使用していただいています。神父様はひたすら御父に祈る方、御言葉を生きる人、苦しみ逆境を祈りによって善に変える

方、癒しの方、愛する方でした。またフランス生まれの神父様は、自由・平等・博愛の精神を大切にしておられました。九十六歳まで車を運転、二十年間自炊生活、買い物、料理、家事、そして町内会にも参加。神父様の計報を知って、同じマンシヨンの方が泣いておられました。」

フォールテン神父様を偲び、神父様の永遠の安息をお祈りします。

東京・初台教会 井之上靖子

三月二日・灰の水曜日に、フォールテン神父様が帰天されたこと

以下に、略歴を記させていただきます。

パリ外国宣教会神学校、パリのカトリック大学神学部を経て、一九四七年からローマのグレゴリアン大学で学び、司祭叙階後一九四九年十二月一日来日。大阪教区へ（神戸で二年間日本語研修）。一九五二年四月から小

教区で宣教・司牧活動。翌年、バラド神父と共に、尼崎教会に赴任。一九五六〜五九年、JOC（働く若者のグループ）阪神

地連指導司祭。カトリックアクションについての本の翻訳出版。一九六〇年〜六二年、フランス

へ一時帰国の後、福岡教区で司牧。一九六四年大阪教区に戻る。一九八〇年十月、聖霊による

刷新黙想会参加。世俗化された環境の中での新しい出発。

とを知らされて、私は本当にびっくりしました。九十二歳でしたので仕方がないと、自分を納得させました。

大阪の吹田教会で三月八日に
お葬儀があると聞いて是非伺い

一九八六年〜タルデイ神父の著書5冊の邦訳出版。ローランタン神父の「メジユゴリエにおける聖母マリアの出現」の翻訳出版。その他数冊の日本語訳出版「キリスト者の成熟」「福音宣教細胞グループのハンドブック」など。

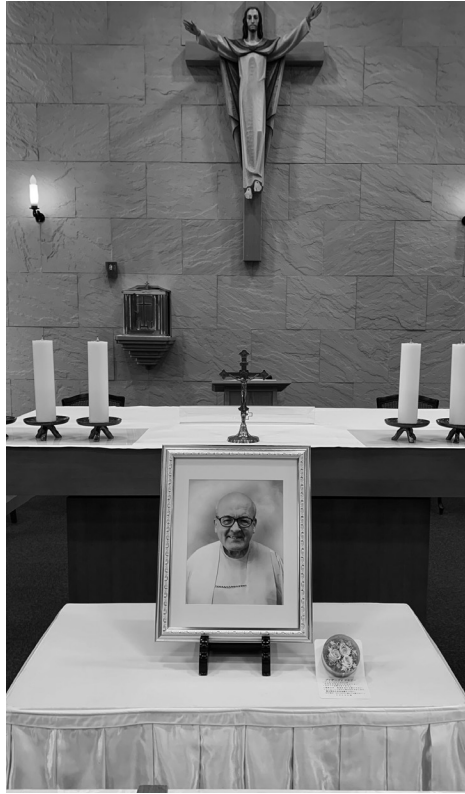
一九九三年〜九四年、サバチカル。九五年、三重県の上野教会で、福音宣教細胞グループ。

一九九九年四月、静岡県浜名湖畔にある聖ベルナルド修道院のチャプレンとなる。

二〇〇一年十月〜フリーの立場。神戸市住吉教会での司牧。二〇二〇年九月〜ドムス・

ガラシアにてマンシヨン自活生活。二〇二二年一月七日、帰天。享年九十七歳でした。

たいと思いましたが、今のコロナ状況下での人数制限で出席はなりません。その代わりに前日に朝九時から夕方五時までご遺体のお棺を開け、教会をオープンにして自由に弔問することが



いつもにこやかな神父さんでした。

出来るようにしてくださいました。沢山の方が入れ替わり弔問にいらしていました。私は、お昼頃に神父様のご遺体の側に着きました。その顔を拝見して、もうここには神父様はいらっしゃらないと感じました。傍のベンチで、神父様のために神の慈しみのチャプレットとロザリオ

を祈りながら、フォールテン神父様が聖霊の満たしを受けた時の証しを私たちに分かち合ってください。それが、神父様が初台祈りの集いの黙想会でお話し下さった「聖霊の満たし」の体験談です。

《一九七七年その年の黙想会に

他の神父さんたちは既に出かけてしまっていました。私はいまだ行き先も決めていませんでした。それで今からでも申し込める黙想会があるか探しました。すると宝塚の御受難修道女会の場所を借りた『癒し』の黙想会がありました。当時の私は「癒し」という言葉がいやでした。けれども、行くことにしました。黙想会に参加してプログラムが終わる度に、私は聖堂に行つて祈りました。「神様、これは本当にあなたからのものですか。私は司祭として私の教会の信徒に対して責任があります。」でも、神様からの答えはありませんでした。

の時はやって来ました。「満たしを受けた方は立ってください。」すると、昨日私に「どう思いますか？」と聞いた神父さんは直ぐに立ち上がったのです。私は一瞬たじろぎましたが、その神父さんに「大丈夫、心配しないで」と言った手前、私も立つことにしました。これは神様のご計画でした。そして「満たしの祈り」を受けました。何も起こりませんでした。他の人のように泣いたり、叫んだりなどの反応もありませんでした。「ああ、よかった。何もなかった。」

婦りの新幹線で、私は普段三人掛けの真ん中の席が嫌でしたが、その時は嫌ではありませんでした。その時、はつきり隣にイエズス様が座っているのが分かったのです。そして聖務日課の「毎日の祈り」の本を開き唱え始めました。すると、これまで何度も唱えてきた言葉のはずなのに、いつもと全く違って、詩編が生きたこととなり、私の心に飛び込んで来ました。驚

いて、本を閉じました。しばらく目を閉じて、また本を開くと、先ほどと全く同じでした。そして、私は赦しの秘跡を受けなければならぬと思いました。すぐにカトリック手帳を開き、乗り継ぎの駅から一番近い教会

を見つけて、赦しの秘跡を受けました。涙がとめどもなく流れました。あまりにも涙が流れ泣いているので、その赦しの秘跡の神父さんが心配して、「大丈夫ですよ、神父さん、安心してください。あなたの罪は赦され

ていますよ」と私に言うほどでした。》
これは、何と美しい聖霊の満たしの光景でしょうか。主に感謝、賛美、栄光！

日本における聖霊による刷新五〇周年を

振り返って（特集・その二）

私の原点・祈りの集い

横浜・菊名教会 奥山崇夫

四谷にある上智大学十二階での「祈りの集い」に参加したが、全ての始まりでした。四十年近く前のことです。それまでは、会社員として別に不満もなく暮らしていました。キリスト教には多少の関心はあるものの、自分には無縁のことだと思っていました。

半年ぐらい前から、私の母と娘が日曜日に四谷の祈りの集いに参加するようになっていました。娘の行動は親として気になるものですが、母も一緒なので、

特に心配はしていませんでした。しかし、集いに参加していたマシー神父から「親はいるのか」と尋ねられたというので、夫婦で様子を見に行くことにしました。

会場に入ると、私が持っていた「祈りの集い」イコール、静かで堅苦しい、というイメージからはほど遠い雰囲気驚きましました。

集いで歌われていた賛美の歌を数曲聴いているうちに、身を覆っていた緊張感が緩み、暖かく幸せな気分になっていったのを憶えています。

その後、人生について考え、

共に道を求めていた友人たちも集いに参加するようになりました。

私たち夫婦は、マシー神父にご指導頂いて受洗しました。友人たちも次々と受洗に導かれて、その数は三十人以上になり、黙想会などで共に信仰を深め合ったことを思い出します。

マシー神父の指導で特徴的なことは、「祈りの集い」への参加と共に、聖書を読んで黙想することを強く勧められたことでした。最初は、何の手応えがなくとも、それを続けることが大切だという持論でした。この「沈黙の祈り」を続けること

*その後、フォールテン神父様は、今は先に帰天された太田逸子さんと共に、初台教会内に設けられた聖霊カリスマセンターでの奉仕にも大いに尽力くださいました。

……

その後、関東大会や全国大会にも参加して、親しい友人たちもできました。

一方で、地元小教区での信仰生活を重視するようにも勧められ、小教区共同体での活動にも力を入れるようになりました。その結果、三十年以上にわたって小教区での様々な奉仕に従事しました。財務委員長、教会委員長、副委員長、同じく委員長、新聖堂・献堂式典委員長などです。教会事務局の職員としても働きました。

いま振り返ると、あのとき、四谷の「祈りの集い」に参加したことによって、今の自分があのだと思っています。

当時の自分は、金融機関に勤

務っていて警戒心が強かったの
で、理詰めでキリスト教を勧め
られても、なかなか受け入れる
のが難しかったのではないかと
思います。

しかし、集いで出会った皆さんは、何も理屈を言わずに受け
入れてくれて、ただ共に神様を
賛美しているだけでした。そ
の皆さんの暖かな賛美の歌声に
よって、頑なな心の扉が開かれ、
自然に自分も歌いだしておりま
した。

一緒に集いに参加した友人た
ちの中には、まだ社会に出る前
の若い人も多かったのですが、
共に賛美を続けていくうちに心
がほぐれ、キリスト教を受け入
れるようになったのでした。「
祈りの集い」が巧まずして宣教
の一端を担った実例だったので
はないかと思っています。

二千年前のイエスさまは、人
々が理解しやすいように、例え
話を用いて人々に話されたと言
われています。

人工衛星を打ち上げ、核爆弾
を持ち、インターネットの技術

を駆使して、当時とは比べもの
にならない程の科学文明の発達
した現代社会。そこに生きてい
る私たちは、イエスさまの言葉
を、どう捉えるべきなのか、と
問いかけられているのかもしれ
ない。そんなことを考えながら
聖書などを読み、思うところを
書き留めたりして日々を過ごし
ている昨今です。

主は今生きておられる
北海道・名寄教会

久保伊都子

二十五年前、人生で初めての
霊的な体験をしました。神父様
が高く掲げると聖体に金色に輝
いた十字架のヴィジョンを見た
私の人生は、その後思ってもみ
なかつた方向へと導かれて行き
ました。当時海外に住んでいた
私は日本に戻り、一九九九年に
四ツ谷の集いで聖霊の満たしを
受けました。集いを通して出会
った素晴らしい霊的兄弟姉妹は
今も私にとっての大切な宝物で
す。

東京で開業していた助産院を
二〇二〇年に閉じて、一人暮ら
しの母が住む故郷に戻りました。
その直後に母の癌が見つかり、
残されたひと時を母と共に暮ら
すことが主の計らいであったと
感じました。闘病中の母と共に
ロザリオを唱えた日々は今では
懐かしい思い出です。受洗して
から一か月後の昨年六月十八日

に、母は多くの方たちの祈りに
支えられながら自宅で安らかに
帰天致しました。亡き母の為に
日々ロザリオを唱えることが私
の日課となっています。

母の死後に私は自動車免許取
得のため教習所通いを始めまし
た。六十五歳という免許返上にも
近い年齢の為、当然のように
妹達や友人からの反対がありま
した。ですが田舎では自動車があ
ないと何かと不便で、隣町にあ
る教会に通うことさえも一苦勞
なのです。「主よ、あなたの御
旨でなかつたら、どうぞ試験を
落としてください」と祈り続け、
スムーズにすべての試験をパス
できたことは主の御旨であった

と信じています。運転の前には
必ず主の祈りと天使祝詞は唱え
るように心がけるようにしてい
ます。

数日前のことです。旭川の病
院の救急外来から妹がくも膜下
出血で緊急手術が必要との連絡
がありました。至急病院に行か
なければならず、悩んだあげく
私が旭川までの七〇キロを運転
することになりました。ただひ
たすら祈りながら緊張の道のり
でした。旭川の病院に着いた頃
には手術も無事終わっていました。
妹の頭痛は四日前に始まっ
ていたそうです。そして前日救
急搬送されたのですが、救急外
来で撮ったCTから問題なしと
いうことで、一旦自宅に帰され
たそうです。ところが疑問を持
った技師により脳外科医に伝え
られ、翌日早朝に病院から妹に
連絡が入り、即刻入院となった
のでした。内頸動脈瘤からの出
血で、破裂ではなく、血液がじ
わじわ出ている状態のようでした。
手術前の意識も鮮明であり、
「不幸中の幸いでしたね。」と医

師から言われるほど程度が軽く、手術後の経過も良好です。病院を後にして、妹の用事を足すため暗くなった車の多い旭川市内を運転するのは至難の業でした。道に迷い、中々目的地にたどり着けず疲れ果てたその時に、旭川に住んでいる友人から電話が入りました。そして十五分後は助けに来てくれたのです。

その日、同じ町に住む友人が定期健診のために旭川に来てホテルに宿泊することになっていました。その為、私も同じホテルに宿泊することに決めました。ホテルに無事着いた夜、彼女から「少しお話しできない？」とラインが届きました。

友人は多発性骨髄腫で四年前に幹細胞の移植手術を受けていました。そのような大病を患ったとは思えないくらいに今は元気になっています。その日受けた検査結果は良かったのですが、主治医から再発すると急激に悪化することがあり、今後も抗がん剤内服を続けるように言われ落ち込んでいたのだそうです。



思い出のアルバムから

ところが妹の経緯、困ったときの友人の助け、そして免許の取得さえも、私が全てにおいて「守られ、導かれてる」と彼女は強く感じたのだそうです。『カトリック祈祷書 祈りの友』を私が手にして、「いつもは祈ってないのに、たまたま今日は早朝からしつかりこの祈祷書で祈り、守護の天使にも祈っていたの。」と何気なく話しました。すると彼女が祈祷書に興味を持って見せてほしいというのです。様々な祈りが載っているのを知

ると、「この祈祷書はどうしたら手に入るの？ 私も欲しい」と、まさかの発言。未信者の友人がいきなり祈祷書？と、正直驚きました。今まで落ち込んでいた彼女が元気になっていたことは明らかでした。帰り際いつものように明るく「今日話せてよかった」と言いながら友人は自室に戻っていききました。翌朝5時に誰もいない大浴場で30分ほど、私たちは湯につかりながらおしゃべりをしました。その内容のほとんどは忘れましたが「心にしみた」と言い、私は「だとしたら、それは私からのものではなく、聖霊が私を使って語られたからだと思う」と、語ったことだけは覚えています。私の中に信仰に導こうなどという思いはありませんでした。ですがキリストと共に生きることを望んでいたなら、聖霊が働き、自然に周囲への福音宣教へと繋がっていくことに気づかせていただきました。本棚を探したら、私はもう一冊大きめの同

じ祈祷書を持っていたのです。全ての出来事が偶然ではない。数年前に購入したこの祈祷書も、やがて彼女に渡すようにという神様のご計画であったように思っています。

私たちの主は生きておられる

元四谷の集いメンバー

市川 章子

「私たちの主、イエス・キリストは生きておられる」、これこそ聖霊様が私たちに、出会い、体験し、生きて欲しいことであると、実感している今日この頃です。地球温暖化による異常気象、また地殻変動、コロナ、ミヤンマー、ウクライナと危機的な状況に見舞われている今、目覚めて祈るようにと導かれている気がします。「主は生きておられる」ことを知らずに、また体験できずにいる多くの方々に主との出会いの恵みが与えられますように。地の表が新たに

私に聖霊による刷新に導かれ

たのは、大学生の頃、教会学校でリーダーをしていた時でした。インドの貧しい子供たちを支援しているシスターが、その子供たちのスライドを見せに来て下さいました。その中の心に残ったもの。一枚は目がくり抜かれている路上生活者、もう一枚は裸の7才の男の子が、洋服を着た2才の女の子を抱きかかえているものでした。私はシスターに質問しました。なぜ目がくり抜かれてあるか。それは親がその子に生きていてほしいから、施しものでいのちが助かるように、愛ゆえに自らくり抜いたと。また、もう一枚の男の子は、2才の妹を連れて逃れて来て、いつも妹を抱いていたから、妹の椅子であるかのように腰が曲がっていて、またもらったものはみな妹にあげるの、男の子は裸でも妹だけは洋服を着ていると。貧しさの中のそのような心は、今までの私の思いをはるかに超えたことで、衝撃を感じました。

そして、シスターが帰る時に



私たちは皆、神の若者です

「これからいいところに行くけど」と誘われました。どういふ所かは教えてもらえないまま、スライドに心を動かされていた私は、この人の言う「いいところ」に興味をもってついて行きました。そこが聖霊セミナーの一週目でした。すでに私は参加者であることになっていて、テキストを買い、参加費も払うこととなりました。着席し贅美が始まりましたが、異言をとまなう熱烈な祈りに違和感を感じました。しかし、会費を払ってし

まったので、8週間だけ通うことにしました。集いの人々が「イエス様に出会った」「イエス様はすばらしい」と言う言葉が気になっていましたので、満たしの祈りの時に「イエス様に出会う」恵みを祈ってもらいました。私は幼児洗礼で幼いころから教会に行っていました。そういう言葉を聞いたこともなかったからです。

その後一九八二年、マシー神父とその学生たちの仲間に入れていただき、フィリピンでの一か月の旅で共に生活しました。毎日祈りの集いをする旅でした。旅の中頃、私たちのグループと現地の学生たちと四十人位で、山の湧水でできたプールに泳ぎに行きました。私たちのグループの一人がプールの中でコンタクトレンズを探していました。コンタクトをしたまま泳いでいたのです。皆でプールの中を探しましたが見つかりません。そのうち「祈りましょう」と言う人がいて、皆でプールサイドに上がり祈りが始まりました。公

共のプールです。私は「祈っても出てくるはずない。恥ずかしい。みつともない」と心でつぶやき、祈っているふりをしていました。

いよいよ帰国する時に、マニラ空港のカウンターですごく待たされました。挙句の果てに「今日のフライトはなしで、明日のフライトになる」と。私たちは航空会社の用意したホテルに宿泊し、翌日の飛行機に乗りました。成田に着く直前に機内放送があり、私たちの名前がぞろぞろ呼ばれ、連絡事項があるとのこと。それは「フライトが一日遅れたので航空会社から一人一人に二万五千円ずつ支払われる」というものでした。私は「ラッキー」と思いながら歩いていると、「よかった、これでコンタクトが買える」という声が耳に入りました。見るとコンタクトを失くした人でした。私はとっさにプールサイドの祈りの場面を思い出しました。その時コンタクトは見つかりませんが、新品のコンタクトが手

に入り、また祈ったふりをした人にもまでもご褒美が出る。私たちの思いをはるかに超える形で祈りがかなえられる。祈りを聞いて下さる方が確かにおられ、その方は心広く、愛にあふれておられ、私たちの日常生活のコンタクトレンズ一枚にも関わって下さる方である。これが「イエス様」。私は「イエス様は確かに生きておられ、私たちの祈りを聞き、応え、日常の細かいところまで配慮して下さる方である」と心から確信しました。

二〇〇〇年にマシー神父のグループの聖地巡礼に参加した時、キリストの墓に行きました。墓は空でした。日本に帰ってきて思いました。キリストは復活されたので、わざわざ聖地に行かなくても、目をつぶればどこでも聖地。キリストは生きておられ、共におられる。

私は現在、コロナ禍で生活が一変してしまいました。長年東京に住んでいて、この数年は新潟の実家の両親の介護が必要になり遠距離介護をしていました。

しかしコロナ禍では、介護サービスを受けている両親と東京から来て接触するには、どこかで二週間自主隔離して来なければいけません。もはや仕事をしながら通えなくなりました。全く思いがけず、仕事も辞めて新潟に転居し、今は介護専門の日々を過ごしています。もはや自らのいのちを守れなくなっている両親を見守っていくには、二十四時間緊張感を伴います。教会にも行けず、親と自分に向き合う生活です。でもいつかは終わるこの生活を一日一日大切に生きようと思っています。毎日、食前の祈りを一緒にしてから食事ができることは感謝です。短く祈りのことばを唱えた後で、みことばの日めぐりによって、その日のみことばを聞いてからいただきます。

私の力では何もできません。生きておられ、共におられる主イエス様が最もよいことをして下さることを信じ、信頼して歩んでいきたいです。

【2022年全国コムニオ奉仕会主催による

聖霊による刷新全国大会の予定のお知らせ】

皆さん、2022年は日本のカトリック教会に聖霊による刷新の流れが紹介されて、50周年を迎えます。まだまだ、コロナ禍ということもあり、教会でのミサ、集会も以前のように出来ない状態ではありますが、50年の節目を迎えて、この日本の地に聖霊の祝福と恵みがますます豊かにありますようにと願いつつ、今年は全国大会を予定しています。

8月27日（土）、28日（日）に2日間の50周年記念大会を企画中です。コロナ禍ですので、規模を以前よりは縮小した形で行なうことを考えています。対面参加人数は百名ほどで、制限がありますが、オンライン参加ができるよう、準備していくことを検討中です。

以上、皆様のお祈りのサポートと、いずれかの形でのご参加をお願い申し上げます。なお詳細は、HP、MLなどで周知してまいります。